

手元に、一つのレポートがある。平成七年三月発刊の「沖繩におけるモデル離島による振興開発調査報告書」と言う冊子の中の、僕自身が書いた活動レポートである。タイトルは「島は海に向かって開かれている」と言うもの。当時の僕の肩書き「竹富町青年団協議会事務局長・小浜島青年会文化部長」が何とも懐かしくもあり、何だか気恥ずかしい気もする。

さてこの中で僕は、竹富町青年団協議会の有志のメンバーで出かけたインドネシア・バリ島の視察研修の事を記しながら、こう書いている。「自分達の芸能は地球規模の価値があるのだと言うことを島の青年達が分かった時、自分の島に誇りを持ち、島に生まれた事への認識を深め、そこから自発的な島興しに繋がっていくと思う」と。

まさにこの十年間、僕は「文化」を基調とした島興し、マチおこしを積極的に進めてきた。小浜島で手がけた「キビ刈り援農塾」は十二年目の今年も全国の若者達を受け入れる準備に迫られるくらい元気だし、島の手作り音楽祭も今では

「ちゅらさん祭り」に発展し小さな島の大きなイベントとして毎年の恒例行事となっている。そして何よりも、その企画や取り組みなどがきっかけで、僕自身が公共文化施設「うるま市(旧勝連町)きむたかホール」の初代館長に就任してしまっただけだ。

四年間務めた館長職を今年三月に卒業し、今は「地域住民」と「文化行政」をつなぐ「ジョイント役」として「那覇市芸術監督」の職に就き、更に今年四月「教育で地域をおこし、文化で産業をおこす活動」を信念とした「有限責任中間法人タオファクトリー」を立ち上げたことは、十年前の想いと何ら変わらぬ「文化」に対する揺るぎ無き「信頼」によるものである。観光産業が、今の沖縄経済の背骨であることは間違いない。だからこそ、あえて僕が提唱したいことは「観光立県おきなわ」に加え「文化立県おきなわ」を真剣にめざす取り組みを、今こそすべきではないかということである。いや、あえてもう少し突っ込んだ提案をさせて頂けるのなら、自立した「新生おきなわ」をつくるキーワードは「文化と教育」ではなからうか。

沖縄文化力で世界を結ぶ

南島詩人・演出家 平田 大一(ひらた だいいち)



ある著名な方は「政治や行政が『ハート』をつくる仕事なら、文化や教育は『ハート』をつくる仕事である」と僕に語りかけ、僕のこの考え方を全面的に支持すると言ってくれた。観光も、農業も、製造業も、福祉も、企業も、それを発展させ支えるものは「人」であり、その「人」をつくるのは「教育」である。また、「文化・芸術の為のひとづくり」をするのではなく、豊かな人をつくり、豊かな心をはぐくむ為にこそ「文化・芸術」は必要なのである。

沖縄が、文化と教育で全国の何処よりも先駆けした取り組みをすることで、沖縄らしい地域活性化の

モデルケースとして全国から、世界からも注目を集めるであろう、と僕は真剣に考えるのである。この島の未来を思うとき、その答えは何も海の向こうに有るのではない。豊かな自然の中に、生きる智慧を持つ先人の心に、島を想い踊る祈りの中に、全ての答えがあるのでないか。まさに「視点は郷土、なれど視野は世界」の意気込みで、この時代の荒海を「文化の帆」を揚げて、これからの威風堂々と渡り歩いて行きたいものである。

古の琉球人「レキオス」達のように、沖縄文化力で世界を結ぶ日を夢に見ながら。